

まえがき

『成人して酒飲んで遊んでいたら、40歳で死ぬよー』

3歳から高校卒業するまで毎月通っていた国立病院の先生が、最後の診察で冥土の土産の如く放った言葉だった。

小児喘息を患い、胸郭変形もあわさり、閉塞性障害・気管支喘息発作が頻発する呼吸困難な身体に生まれた僕は、『あ、そうやって死ぬのね』と自覚は早かった。多少の恐怖や寂しさがあがり、親友に打ち明けて気を紛らわしたことを覚えている。

今でも気管支は細く、肺活量は成人男性の半分しかない。

きつと先生は注意喚起として脅すように宣告してくれたのだが、そのときに生まれて初めて『死』を意識した瞬間でもあった。『死の意識』とはつまり、『明日が当たり前のよう来ない』ということ。

これは大袈裟ではなく、人の命なんていつまで続くかわからないことを、〃自分事〃として体感したのです。

母の励ましの言葉で記憶にあるのは「神様は、選ばれた人にしか試練を与えへん。そして、なんでもできる子にはあえてハンデを与える。あんたはハンデを持ちながら試練を乗り越える子なんやで」

それを言われて調子に乗った。まんまと浮かれて、少年の野心に火がついた。喘息なんかになんか運動もスポーツも遊びもすべてうまくこなしてやると誓った。

コンプレックスやハンデを武器に変えることを教えてくれた。

このような経験から、人生の終点を【とりあえず40歳】とざっくり定めた。そこからバックキャストイングして、限られた人生で何ができるかを考えた。命の使い方。使命だとすると、自分の役割はなんなのか、自分の才能は？ アイデンティティは？ 自問自答を繰り返した。そして今となって、なんとなく自分の役割や使命、生きがいを感じていた気がする。今はその役割を全うすることにまっすぐ生きている。

現在36歳、終点まであと4年。

本書では、死を意識しはじめた20歳以降の経験や考えを記しています。生きがいを模索するすべての人へ、生き急ぐ者のすべてを。